

## 平成19年度病害虫発生予察特殊報第2号

平成19年11月7日  
鳥取県病害虫防除所

1 病害虫名 イチジクヒトリモドキ *Asota ficus* (Fabricius)

2 発生作物 イチジク

### 3 発生確認の経過

平成19年10月6日、予察灯(日吉津村に設置)において、これまでに本県では未確認であったイチジクヒトリモドキに酷似した、チョウ目成虫が誘殺された。その後、10月中～下旬に県内のイチジクほ場を調査したところ、鳥取市、北栄町、琴浦町、米子市、南部町などの広範囲で、葉の食害及びチョウ目幼虫が散見された。

予察灯に誘殺された個体及びイチジクの被害葉から採集した個体を、愛媛県病害虫防除所東予支所 窪田聖一氏へ同定を依頼したところ、イチジクヒトリモドキであることが判明した。

### 4 形態

卵は淡黄色で直径約0.8mmのまんじゅう型をしており、葉裏に30～60個の卵塊として産み付けられる。若齢～中齢幼虫は、胴部背面が全体に白っぽく、頭部は黒色、体の側面は橙色である。終齢幼虫は、体長約40mmで、頭部はつやのある黒色、胴部背面は灰色がかった黒色で、腹面は橙黄色を呈する。刺毛基部は橙黄色で、刺毛基部からは長く長い刺毛が1本ずつ生える。成虫は、前翅が褐色の地色に橙黄色、黒色、白色の斑紋、後翅は黄色の地色に黒色の斑紋を有する蛾である。

### 5 発生生態及び被害

(1) 幼虫の寄主植物としては、クワ科イチジク属のイチジク、イヌビワ、オオイタビが報告されている。

(2) 卵は、若い葉の裏に卵塊として産卵される。若齢～中齢幼虫(体長約20mmまで)は集合性が強く、主に葉裏に群生し食害するが、生育が進むにつれて分散し葉表にも生息するようになる。若齢では葉裏から表皮を残して食害するため、葉脈間に白い膜が残る。中齢～終齢になると太い葉脈を残し、葉のほとんどを食いつくす。また、葉が少なくなると果皮も食害するようになる。老熟した幼虫は、樹下の土中の浅いところで土繭を作って蛹化する。蛹から羽化した成虫は、昼間は葉裏に生息し、夜間活動する。

(3) 本種はヒトリモドキガ科に属する南方系の蛾で、沖縄県以南では土着とされている。本州では、1962年に初めて静岡県浜松市で採集され、1980年代に鹿児島市、熊本市、福岡市、大分市などで採集された記録がある。中国四国地域では、鳥根県のほかに6県で発生が確認されている。

(4) 今後、イチジクが落葉期に入り、気温も低下することから、本種の発生は終息するものと考えられる。なお、本県での越冬の可能性は不明である。

### 6 防除対策

(1) 幼虫は若齢～中齢幼虫の間は群生して加害するため、幼虫が分散する前に寄生葉を取り除いて処分する。

(2) 発生初期に、アディオソ乳剤3,000倍液(収穫前日、2回以内)、モスピラン水溶剤2,000倍液(収穫前日、3回以内)を散布する。



図1 イチジクヒトリモドキ中齢幼虫



図2 イチジクヒトリモドキ終齢幼虫



図3 イチジクヒトリモドキ成虫



図4 イチジクヒトリモドキによる食害